

2013. 6. 30 No. 20

# 震災対策 News

日本キリスト教会震災対策事務所 発行者 中家 盾

## <東日本大震災に対する諸教会の取り組み>

東日本大震災から2年3カ月が過ぎた今、日本キリスト教会の諸教会ではどのような取り組みがなされているのでしょうか。被災地から離れば離れるほど現地の様子が分からず、行動や想いを起こしにくくなっている現状があるかと思われます。その中であって、今回は、被災地から遠くにある近畿中会や北海道中会からも行動や想いを寄せていただきました。日本キリスト教会が何を積み重ね、何を生み出していく必要があるのかを考える機会となればと願っています。

## 「第12次被災地ボランティアに参加して」

山 信彦（大垣荒尾教会長老）（近畿中会）

### 1 始めに

礼拝受付で一枚の印刷物がたまたま目に入った。見出しに太字で大きく、「第12次被災地ボランティア募集」とあった。とりあえず手に取りざっと目を通したところ、仙台市若林区での被災地復興ボランティア作業の他、石巻市や東松島市などの被災地訪問プログラムもあるという。

2011年3月11日は趣味の釣りに行き、帰路長良川を跨ぐ橋を渡っていた。橋が揺れているように感じ、ふと窓の外に目をやると背の高い街路灯が大きく揺れていた。それ以降新聞、雑誌、TV等で地震や津波の被害状況を目にしたが、この目で見ることはなかった。募金、支援活動に応じたものの自分が直接かかわる機会はなかった。いつの日か自分も被災地を訪れ、何らかの貢献が出来ればとの思いはあってもその機会が無いまま時間が過ぎていった。

数日間あれこれ考えた挙句、家族に負担をかけることになるが活動内容・スケジュールとも望ましいとの判断で参加を決意した。案内に添付してあった申込書に必要事項を記入し、震災対策事務所の中家盾先生へ送付した。出発まで何回か打合せや問い合わせのメールを遣り取りしたが、親切な対応に感銘を受けた。

### 2 被災地訪問

5月21日の早朝家を出て、仙台黒松教会に到着したのは集合時間の1時であった。早速中家盾先生の車で、仙台黒松教会の中家契介先生と千葉正長老とともに被災地へ向った。最初に訪問したのは石巻の仮設住宅であった。グラウンドを利用して建てられており、被災者用の住宅の他集会室などもあり、空地にはボランティア団体による車を改造した移動図書館や食べ物の屋台もあった。

伺ったのは、今まで「震災対策News」で何度か紹介されている外国人被災者のAさん宅であった。韓国から嫁いでこられたAさんはこの被災者住宅では唯一の外国人とのことで、昼間はひとりでの生活であり、手芸品のマカロン等を作成しておられるとのことだった。（同News19号6～7頁参照）何度も訪問されている中家盾先生とは身の雑談を楽しげにしたり、プランターで育てているエンドウを話題にしたりで、こうした働きの持つ意味を目の当りにすることが出来た。暫くして小学生の息子さん（大川小通学）が帰ってきて、雰囲気が一層和んだところでAさん宅を辞した。

次に向ったのは石巻市であった。漁港から工場地帯、石巻港と海沿いを走ったが、見渡す限り更地で、途中には車が何百台も小山のように積み上げてあった。少し内陸に入り、門脇小学校の廃墟

にも寄ったが、3階建ての校舎はすべての窓が抜け落ち、壁の塗料は屋上まで剥げ落ちていた。津波から2年余を経過し、瓦礫は撤去され遠目には何事も無かったとき風景であるが、人の影すらほとんどない街の姿に被害の甚大さを改めて思い知った。

石巻から東松島へと向かい、日本キリスト改革派東仙台教会が運営している子供のための施設「さくらハウス」を訪ねた。被災地域の子供たちの遊びや学習の場を提供し、また学童保育的機能も果たして親さんたちにも喜ばれている。地域での活動の中からニーズに応える働きを見出し、住民の方の理解と協力で運営されている姿は、隣人と共に歩もうとする東仙台教会の証しそのものである。日本キリスト教会震災対策事務所は第6次ボランティア派遣まで東仙台教会に協力して実施したとのことで、その繋がりでの訪問であった。夕刻仙台黒松教会に到着し、会堂で宿泊させていただいた。当初寝袋に包まって寝るはずであったが、教会のご好意で布団を用意頂き、安眠する事が出来た。

### 3 ボランティア活動

翌22日の朝、千葉長老に迎えていただき、日本基督教団東北教区事務所へと向った。ここに事務所を構える被災者支援センター・エマオで作業の指示をうけるためである。先ずミーティングを持ち、自己紹介を終えてから本日の作業が提示された。それぞれ希望を述べ配置が決められた。私は津波で表土が流された畑に客土する作業を希望し、他の男性2名とともに集合場所の若林区にあるエマオ活動センターへと向った。千葉長老の車に乗せていただいたが、普通はエマオに用意されている電動自転車で活動地点まで移動するとのことであった。エマオにはその為の何十台と自転車が並んでいて、壮観であった。

エマオの若林区における活動拠点は笹屋敷という名の地区にある。地域の方の土地を提供していただき、ビニールハウスに事務所及び資材用の倉庫機能を持たせていた。到着後、スタッフの方に活動場所へ案内していただいたが、この時の移動は自転車であった。途中公民館前を通り、トイレはここを利用するようにと指示を受けた。エマオの活動が地域の方々の信頼を得ているからこそ、こうした便宜を図っていただけるのである。

作業をしたのは菅野さんとおっしゃる野菜専業農家であった。畑の表土が流れて低くなった箇所へ一輪車で土を運ぶよう指示を受けた。ダンプカーで運ばれて積んである土をシャベルですくって一輪車に積み込み、畑まで運ぶ作業に午前2時間、午後2時間従事した。

私は普段100坪ほどの家庭菜園で農作業をしているので、幸いにもあとで腕や腰が痛くなることも無かった。午前、午後のお茶の時間や昼食時には地震や津波の事を詳しく語ってくださった。このあたりは津波が床上50センチ程押し寄せたが、津波が来ることは全く想定外のことだったとのこと。昼食(仙台黒松教会で用意してくださった弁当)は菅野さんのお宅でとったが、畑からお宅への途中で地区の墓地があった。不思議なことに墓石のすべてが新品であったが、津波で押し流されてしまい新たに建てられたそうである。一緒に作業した方の一人は、すでに何度もこの地区で活動されており、当初はお墓に巨木が何本も流れ着いていたとのことであった。

作業を終え、エマオへ戻り報告ミーティングに参加した。それぞれの作業内容を報告し合い、参加した感想を述べ合った。そのあと希望者は「シェアリング」と呼ばれる交流会に参加した。数人の小グループに別れ、参加動機や活動を通して感じたこと、考えた事などを話し合った。見ず知らずの初対面の方とどんな話が出来ると不安でもあり、また興味もあったが、キリスト教関係の施設で働いている若い方や、沖縄へ一家で移住された元TV局勤務の方と率直に語り合えたのは、被災地でのボランティア活動を終えた直後という高揚した気分が影響しての事であったかもしれない。

エマオでは夕食を100円でとることが出来た。一汁二菜で、量もたっぷりの食事であったが、これも仙台のキリスト者によるボランティア活動の一環として用意して下さっているとのことであった。この日の昼食弁当もそうであったが、色々な方々が可能な時間や場所で奉仕する形態が組織されている事を身をもって知る事ができた。また、この日の風呂は千葉長老宅で入らせていただいたが、これもやはり間接的な被災者救援活動ということが出来るであろう。

翌23日は夕刻までに帰宅する必要があるため、ボランティア活動に携わることなく朝方仙台をあとにした。

#### 4 活動を終えて

短くも充実した2泊3日の活動であったが、このことを通して感じたこと、考えたこと等を羅列的ではあるが述べてみたい。

冒頭に書いたことでもあるが、日本キリスト教会の中で震災対策事務所の働きが果たしてどれだけ知られ、また支援されているのであろうか。もっと言えば、事務所の存在そのものが周知されているのであろうか。私自身については大会に出席した折、報告を直接聞く機会もあり存在と活動の概要は知っていたが、「震災対策News」が19号まで発行され、被災地ボランティア募集がすでに11回なされた事は全く知らなかった。小会で参加報告をした際、「震災対策News」が毎号教会に届いていて、ファイルして保存されている事を牧師から伺って始めて知った。このことが出席教会のみのケースであれば幸いであるが、日本キリスト教会全体としてどうなのか、教えていただきたい。

大垣市には「キリスト教市内信徒会」という超教派の交わりが月1回持たれている。この場で他教派の震災対策ボランティア活動を伺う機会があり、日本キリスト教会もなすべき業があるのではと何度か思ったのであるが、「震災対策News」を見て初めて日本キリスト教会の取組みの全容を知った次第である。このことは、先ず何よりも私の受信アンテナの低さに問題があるのだが、発信力や方法にも工夫の必要があるのではないだろうか。「ヤスクニ通信」や「タビタの会たより」のように全員配布する「震災対策News」簡易版があってもよいのではないか。「震災対策News」は、ネット配信されているとはいえ日本キリスト教会の大多数を占める高齢者の中で取ってこれる人をどれだけいるか疑問である。

日本キリスト教会としての震災ボランティア活動はすでに12回行われたのであるが、第1次から第6次までは日本キリスト改革派仙台東教会、第7次から第11次まではカトリック仙台教区サポートセンター/カリタスジャパン、そして第12次は日本キリスト教団東北教区被災者支援センター・エマオの協力を得て実施したものである。はっきり言えば日本キリスト教会には自力でボランティア活動を組織し、運営する力量も、組織も、財力も、人材も無いのである。カトリックや日本キリスト教団とは神学も規模も違うといえはそれまでだが、教理や教会組織が酷似している日本キリスト改革派仙台東教会は教会員数が20名ほどの小さな教会であるが、上記で述べた活動を継続的に展開している。この違いがどこに由来するのか、じっくり考え検討する価値があるように私には思える。この時代、この国で福音を伝えることの内実と方法を、それこそ「神学」的に論議されたいと願う。

日本キリスト教会の震災救援活動を一手に担っている「震災対策事務所」、事務所員の中家盾先生の働きには頭の下がる思いであり、日本キリスト教会にもこのような教職者がおられる事を知り大変頼もしく、嬉しくも思った。栃木教会を牧会しながら現地へ赴いての取組み以外に事務所の運営、震災ニュースの編集、会計処理などその事務量、作業量は莫大なものと察する。第12次ボランティア活動のあと、外国人被災者の面談調査のため気仙沼に赴く予定であったが、疲労でかなわなかったとのことであった。ボランティア参加に際し事務連絡を夫人が代わってしてくださった事からも、夫人が事務作業の相当量を援助されていると察しているが、組織的支援の必要を大いに感ずる。

この文は中家盾先生のご依頼によりしたためているが、「ボランティア活動報告を3~4割、被災地から遠く離れた近畿中会における被災地に対する教会としての取組みのあり方について6~7割」とするようにとの指示であった。ほとんど書き終わってみると割合は逆転してしまっていて、要請の肝心な部分は無きに等しい。そこで、せめてもう少し具体的な提案をしてこの文を締め括りたい。

提案の一つ目は「広報活動の充実」である。このことについてはすでに述べているが、文字の他に映像によるそれも望まれる。被災の状況についてはTVニュースをはじめマスコミにより提供されているが、震災事務所によるボランティア活動などを紹介する映像媒体を中会経由で各小会に配布・上映することで関心や関わりが高まるのではないだろうか。

2つ目としては、出来る限り多くの方に被災現場へ実際に足を運んでいただく事である。遠く離れている事がネックとなり、時間も経費もかなりの負担を余儀なくされる。経費の大部分を占めるであろう交通費は、新幹線利用となれば一人当たり4~5万円となり、これだけの金額を献金した方が有意義であると考えてしまうほどである。しかし、現場を踏む事はやはり大事で意味深いと取って主張したい。北海道の函館相生教会が計画し、震災対策事務所と共催で実施した被災地訪問の旅はこの点について大いに参考になる企画である。各個教会では難しいかもしれないが地区レベル、あるいは

中会レベルであれば十分実施可能な規模となるはずで、しっかり勧誘して募集すればバス1台分の参加者は得られるはずで、現地でのプログラムも充実して実施可能である。そうしたイニシアチブを誰が取るのか、そこが問題である。

日本キリスト教会の活動は理念はともかく、実体として教職者が担っている。組織の専従者として、種々の活動を企画、運営するのはやはり教職者であろう。その教職者が活動の意義と必要性を感じなければ何事も動かないのは必至と言わざるを得ない。教会の伝統、体質として教会から一歩出て、小さきものに寄り添いともに歩く働きの経験が少なく、またそのことに意義と喜びを見出す教職者が多くないのではないだろうか。「教会の命はみ言葉を語ることにあり、聞くことにあり」との主張に異議はない。語り、聞くことの中から生身の人間としてどう歩むか、そこが問われているのではないだろうか。

異なる環境に身を置くことにより新しい出会いを経験し、世界が広がる経験を誰しも持った事があるだろう。それまで見えても見えなかったものが見え、聞いていても聞こえなかったことが聴こえてくる。会堂の一歩外へ出るにより、異なる新しい世界を経験する事は教会に新しく生き生きとした命を吹き込むことに繋がると期待したい。

## 「函館相生教会の東日本大震災との取り組み— 過去・現在・未来」 久野 真理子（函館相生教会教員）（北海道中会）

大震災から、2年3カ月になります。私たちは自分のことに追われ、地震・津波・原発のことが一地方のことになっているのではないかと懸念されます。今年はじめ、「第一回被災地訪問」に参加された一人の姉妹からいただいた手紙の中に「相生教会ボランティアの計画があれば参加したい」ということと、「強盗に襲われた隣人を遠くから見ていただけの教会人にならないよう…」と書かれていました。これまで以上に「誰が隣人になったと思うか？」のみ言葉に迫られます。相生教会では、襲われた隣人に少しでも「近づこう」とボランティアの会を中心に「被災地訪問とボランティア」を、また、図書委員会、壮年会・婦人会、伝道委員会が「放射能、原発」についての学びを続けています。中家盾牧師からのご指示にそって、これまで、現在、そしてこれからの相生教会の取り組みを下記に記します。

### ボランティアの会の活動

①2012年5月21日（月）～24日（木）の「第一回被災地訪問とボランティア」のことは、「大会震災対策ニュース15号」で21名の参加者の報告が詳しくなされている通りです。

②2012年10月1日（月）～5日（金）、「第二回被災地ボランティア」が持たれました。5月に献げられた献金を基に、ボランティアが派遣されたのです。前回と同じ、カトリック釜石教会でカリタス・ジャパンのボランティア活動に参加しました。傾聴、草むしり、手芸クラブ、食事作りなどをしました。釜石市や大槌町の人びと、またお店との関わりをより深める事ができました。前回と違うことの一つは、ボランティアのためにボランティアが食事を作ることです。相生教会の女性たちは実力を発揮し、少し汚れていたキッチンをきれいにし、保存されている食糧品で美味しい食事を作って、みなさんから大変喜ばれました。また、スタッフによってボランティア活動がしやすいように、混乱しないように、不備だったところが、いろいろ工夫され、整理されていたことも驚きでした。今回の参加者5名の中には初めて参加した求道中の青年が与えられました。彼は、仮設の方々やスタッフ、他教会のボランティアの方々とよく交流し、ピアノを弾いたり、良い声で歌ったり、お茶を入れたり、掃除したりと大活躍でした。教会では見せたことのない顔でした。彼は「以前の私のような、『住んでいる人が少ないなら、その仮設住宅は廃止して、大きな規模の仮設住宅に統合してしまえばいい』という考えは、今までそこに注がれてきた、住民やボランティアの皆さんの力を無視し、培われてきたコミュニティを破壊する、冷たいものだと、ようやく気づきました」と、実際に足を運び、触れて初めて知ることのできたことを感想文に記しています。3日目の早朝ミサでは、晴佐久昌英神父から「神さまからボランティアとしてあなたたちは立てられたのです。大きな祝福の中にいれているのです」というようなお話があり、私たちはがぜん元気になったのです。

③相生教会ではその他に、被災地の物産を取り寄せる事も心がけています。昨年、壮年会の「母

の日」の婦人会員へのプレゼント、6月の北海道中連婦での販売、12月のクリスマス時期の取り寄せなど、小さな協力ではありますが、みなで被災地を覚え続けています。また、今年も5月12日、「母の日」に壮年会の婦人たちへのプレゼントは大槌町の焼き菓子「城山ポテト」でした。北海道ではできないサツマイモのお菓子は喜ばしいお味でした。震災前、岩手県洋菓子コンクールで入賞したお店のお菓子です。今、仮設商店街は必死で立ち上がろうとしておられるのです。お訪ねしたり、電話で注文したりする中で、温かい心の交流ができてきてこの上もない喜ばしいものを感じる事があります。

④2013年2月末、震災対策事務所を通して、「アニマルフレンズ新潟」に、タオル、毛布、タオルケットなどを送付しました。

・痛みを抱えている場に近づこうとし、繋がり続ける中で、私たちの教会の祈禱会でも、毎週、被災地、被災者のこと、そこで仕える人びとのごことが祈り続けられています。これからも話し合われ、知恵を出し合い、繋がり続けていきたいと思っています。

### 現在、計画されていることは

①6月29日(土)～30日(日)、「被災動物パネル展」。

これは、その時に持たれる伝道集会、伝道礼拝(講師:上山修平牧師)に合わせて開かれます。

②「第三回被災地訪問・ボランティア」を日曜学校・高校生会・ボランティアの会で次のように計画しています。これは「第二回被災地訪問」の時に献げられた献金が基になっています。

・訪問地・・・釜石市、陸前高田市、大槌町・遠野市

・7月29日(月)～30日(火)は訪問のみ・・・日曜学校の小学生、中学生、教師

・7月30日(火)・遠野の民話の里で民話を語り部から聞く。

・7月30日(月)～8月2日(金)・ボランティア(カリタス・ジャパン大槌ブース)・・・

高校生会の生徒、教師のみ参加

### 図書委員会の活動

原発について、真素人の私たちですが、青森大間原発の北23kmにある函館に住む私たちはこのことを他人まかせにしておくことはできません。そこで、少しでも知ろうと、学ぶことから始めました。

まず、2012年11月図書委員会で11月1日に出版された『原発とキリスト教』(新教出版)の読書会をすることが話し合われました。初めての読書会、しかも「原発」という、私たちの教会ではこれまで取り組んだことのないテーマですから、小会に報告し、丁寧な準備がなされました。図書委員(当時86、84、79、78、74、73、63歳の女性7名)は全員本を買って、読みこんで準備しました。本のはじめにある宮田光雄さんの「日常性を越える《いっそう高い次元》とういうのは、宗教的に言えば神への《祈り》であり、終末論的希望にたいする根源的信頼の表明です。この信頼と希望に支えられるがゆえに、なおこの地上に踏みとどまり、新しい将来を形成するために働く勇気を持ちうるのです」に基を置き、「地球市民としての連帯性に生きる責任を担うべきでしょう。未来の世代や、さらには自然の生命をもふくむ、すべての生きとし生けるものとともに生きる道を選び」とろうとの思いを強くしました。

2012年2月28日、「みんなと話す『原発』って何?～『原発とキリスト教』を読む～」という題で読書会が持たれました。

①「放射能を聖書の視点から考える」上山修平牧師(横浜海岸教会牧師)

②「被造物への責任からドイツの教会は原子力とどのように向きあってきたのか」

木村護郎クリストフさん(専門は言語社会学、ドイツ社会研究。無教会事由が丘集会参加)

③「『核』否定の思想に立つYWCAの歩みから」

鈴木怜子さん(日本YWCA理事長、教団代々木上原教会)

以上の三つの課題が発題者によって選ばれ、誠実な良き発表がなされました。この学びと、参加者全員に無記名で書いていただいた「一言コメント」を土台に全員での話し合い、最後に牧師のまとめという内容です。「一言コメント」は「図書室だより」にも載せて、教会全体にも伝えました。その中から少しピックアップします。「放射性物質に対する知識不足を痛感し、しっかりと学ぶべきと思った」、「正しい判断をするために真実を知る必要がある」、「原発を進めることは、神の領域を侵すことなのか?」、「福島原発事故後でも、原発再稼働、他国への原発の輸出を図る政府の考えがわからない」など

自分の言葉で書いてくださいました。参加者は31名(教団の方たちも三人参加)でした。このとき、目指されたことは、「今日、結論を出すのではなく、まず、原発について、知ること、関心を持ち、考え続けること」でした。その第一歩が踏み出されたのです。

図書室には、岩波ジュニア新書を中心に、わかりやすい「放射能」、「原発」、「エネルギー」関係の本が備えられてゆきました。また、新聞の切り抜きを始めたり、個人的にですが、誘いあって講演会などにも行ったり、大間原発ツアーに参加したりと学びは続けられています。

昨年12月3日、大間原発ツアーで出会った野村保子さん(『小出裕章さんのおはなし』の著者。函館在住のジャーナリスト)を講師に迎え、「放射能について」の勉強会をしました。チラシ等を見て、教会は初めてという方が7名来られ、原発に対する関心の深さを感じられました。祈りを持ってはじめられ、最期は牧師のコメントがありました。野村さんはプロジェクターを用いながら、特に大間原発について詳しく話されました。大間原発は「プルトニウムとウラン混合」という他の原発より格段の危険性の高いものであること、大間原発の目的はプルトニウムの電気を作るためではなく、あり余った猛毒のプルトニウムを処理するために作られること、原発からの温排水で函館の漁業は大きなダメージを受けることなど、多くを学ぶことができました。

### 壮年会・婦人会合同学習会

学習会で『キリスト者として“原発”をどう考えるか』(内藤信吾著)をテキストにして2月から5月まで4回にわたって学びました。

全4章を1章ずつ1人の者が担当し、研究発表、その後話し合いというかたちで持たれました。原発についての信仰的理解、原発の危険性、原発が本当に必要か、そして、エネルギー問題と学んでゆきました。「創世記1章28節の『支配せよ』の訳は『管理しなさい、お世話しないさい、仕えなさい』の方がより真意を伝える」、「原発に関するすべての段階で被爆被害があること」「核廃棄物一核のゴミの問題」「原発と原爆は紙一重であること」など、まだまだ書ききれないほどの学びをしました。その中で、「脱原発」と言うが、そのことに伴う私たちが負わなければならないもの、生き方についても示されました。作ってしまい、それを許してしまった私たちの責任、原発作業員のこと、廃炉にかかる費用、足るを知る生活のありかたなどです。

最後の4章では17年前の三浦綾子さんの言葉を、発表担当の姉妹が紹介しました。「自分が死ねば人生は終わりではなく、伝えるべきものを後に引き継いで死んでいかねば。本当に引き継ぐべきものとは何でしょうか。私たちが借りた家をきれいにして持ち主に返すでしょ。それと同じように、地球をきれいにして(原発は止めなければなりません)21世紀に生きる者に引き継ぐことこそ、これからの人間がすべき最も大切なことではないでしょうか」

牧師は「再生可能エネルギーを開発していく知恵を出し合うことも大事です。神が創造された世界、そして神が『よし』とされた世界を神にお返しする責任を、そうした面から考えることもあってよいのではないのでしょうか。神による被造世界を最大限に活用するのです。……『キリストがまたお出でになる』という信仰に立つ時、私たちは自然に対しても、他者に対しても、無責任ではありえない生き方を追求せざるを得ないものとされます」と補足しました。そして、ニーバーの言葉「人間はまったき善を行うことはできない。より小さい悪を選びとるという形でしか行動できない」を引用し、「人がなすことにはいつも罪が伴うものである、しかしその罪をより小さなものとして選びとっていくことはできる。そういう信仰の知恵と良識を求めながら聖書に導かれつつ、示された道を共に歩んで行きたい」と発言しました。

これまで、あまり原発に関心のない人も、賛成の人もともに学ぶ貴重な時でした。話し合いの時には時間オーバーになるほど活発な意見交換がなされました。原発の必要性を話す人も、止めるべきと言う人もあります。教会全体の意識が高まって、「テレビを見ていても、今までの見方とは違う」とか、「これまで自分のまわりのことだけだったけど、社会にも目が向けられてきた」という言葉が聞こえてきました。

### 伝道委員会

6月29日(土)、上山修平牧師を講師に迎え、伝道集会(講演会)が持たれます。

題は「まだ続けるのか、原子力発電～人類の未来への責任をかんがえる～」です。  
大きな期待を持って、伝道委員を中心に準備をしています。

仮設住宅に住む方々と、「ふるさと」を何度か歌いました。お一人お一人がつぶる目には育った野山、海、川が、そしてそこで、遊び、働いた日々が巡っていることが痛く伝わってきました。仮設の方々と歌ったあと、私にとってこの曲はこれまでと全く違うリアリティを持つようになりました。

地震、津波の破壊による被災者の心の傷が癒され、被災者の望む生活を取り戻すには、計り知れない困難を伴う長い道のりとなることでしょう。それ以上に、原発による破壊は、被造物全体の命の危機につながるものであり、時間で解決できないダメージを被るものなのではないでしょうか。プルトニウムの半減期は2万4千百年です。終わりの時に天地創造の主の前に、再臨のキリストの前にどのような地球をお返しするのでしょうか。自然界にない人間が作りだした核の暴走に私たちはどのように対峙したらよいのか、今、問われているのではないのでしょうか。

教会に集められているわたしたちは、仕事も考え方も多様です。福島原発爆発の直後、私たちは「原発がこんなに恐ろしいものだとは知らなかった」、「『安全神話』に騙された」という思いを強く持ちました。そのようなことを、今後言うことのないようにしたいと思います。まず、知ることから始め、関心を深め、そのうえで自分の考えを自由に構築してゆくことが大切なのではないでしょうか。そして、信仰の良心に従って声をあげること、また私たちのなすべきことを丁寧な求め、み言葉から示されたく願います。

私が話す時には、次のヴォルテールの言葉を読むことにしています。

「私はあなたの考えには反対だが、あなたがそれを言う権利は、私の命のかぎり擁護する」。

今後もそのような思いを持ちながら、原発の問題や再生可能エネルギーの問題、そして被災地支援のことに教会全体で取り組んで行きたいと願っています。

## 『震災ボランティア』と『日本キリスト教会』の働き

田中 伊作（上田教会牧師）（東京中会）

2011年3月11日に起きた東日本大震災以降、3年連続で被災地に行きました。11年は東松島市、12年、13年は南三陸にボランティアリーダーとして参加しました。「ボランティアは誰でも出来る」と聞いていましたし、自分もそう思っていました。実際に行ってみると思いのほかハードは作業が待ちました。東松島市は被災した家屋の壁剥がし、南三陸は漁業支援、石の掘り出し、がれきの撤去作業でした。どれも健康な人ならば可能でしょうが、「誰にでも出来る」という作業ではなかったように思います。もちろん、これ以外にも作業は沢山ありますし、自分が出来るような作業を選ぶこともできます。東京中会連合婦人会も被災地支援に関わっています。絵本を届けたり「話し相手」になったりしているようです。別の所では、「囲碁の相手をする」というボランティアをされた人もいます。私が経験した作業はハードでしたが、それがすべてではありません。出来る事は、結構あります。

被災地に行って感じたことを、2つほど記します。

1つは「若者たち」が沢山来ていた事です。震災から2年経った今でも、若者たち、特に10代や20代の人たちが沢山来ています。南三陸のボランティアセンターの駐車場は、毎日朝からたくさん車で埋め尽くされています。今年2月に行った時は、ちょうど大学がお休みの時だったようで、二十歳前後の若い人たちが沢山来ていました。本当に驚きました。「今でも若者たちこんなにくるんだな。凄いな～。」と感心しながら共に作業をします。2日も一緒にいれば、歳が離れていてもかなり仲良くなれます。日キからの参加者にも若い人はいましたが、どちらかと言うと年齢は高めです。それが悪いとは思いませんし、仕事や学業、家庭の事情で参加できない人もいます。ただ、日本キリスト教会の場合は高齢の方のほうが元気で、若者は少なく元気がない「ように」見えてしまいます。世の「若者たち」は実に元気です。全員だとは思いますが、みんな余計な事をせず、頼まれたことを楽しくしていまし

た。私だけでなく、他の参加者もそのように感じたと思います。

2つ目は「長期的な支援は難しい」ということです。

私たちが南三陸でお世話になったところは、カトリック系の支援団体「カリタス・ジャパン」が運営する「米川ベース」です。教派の違いはありますが、基本的に現地スタッフは「キリスト者」です。古い公民館を借りて、そこにボランティア参加者の世話をしてくれます。食事は無料、布団も洗濯機もシャワーもあります。交通費は掛かりますが、それ以外はすべて面倒をみてくれます。「去年と比べて今年はどうですか？」とスタッフに訊いたところ、「ボランティア参加者は激減しています。全盛期の半分です。支援金も減ってきています。これからしなければならぬことは沢山あります。もっと多くの人に来て欲しいのです。でも時間が経つにつれて、人々の関心も薄れていきますし、継続して支援することの難しさを感じています」と言われました。

やはり長期的な支援は、難しいのです。短期的ならば、「一気に」出来るかも知れませんが、長期になると「継続性」が問題になります。「これで終わり」ではなく、これから1年2年……10年20年と支援が必要かもしれません。報道されていることは本当に一部なのです。民間で出来る事にも限界がありますから、すべてに関わる事はできません。しかし、長期的な支援を考えている人たちが「被災地」にいて、実際にそこに「住んで」「働いている」事を、教会はいつも覚えておかなければならないと思います。「自分」が行けなくても、そういう人たちを「援助」することは可能ですし、そのような「後方支援」でも立派な「支援」になるのです。

正直私は、完全に「ボランティア」として参加しました。中には「ディアコニアだ！」と言う人もいますが、私は「ボランティア」で良いと思っています。そして「キリスト者として参加する」という意識もありませんでした。そこで「宣教」するつもりもなく、「証し」を立てるつもりもなく、ただ頼まれた事をするだけ。終わったら、「お世話になりました。また来ます。」と言って帰ってくる。ただそれだけです。特に「使命感」があったわけでもありませんし、「牧師だから」「教会だから」と考えていたわけでもありません。「見返り」を求めて被災地に行くのではないからです。「あなたは出来ませんか？被災地に行けますか？」と聞かれれば、「行ける」のです。だから「行けます」と答えて、それを行動に移しました。特に「宣教」を意識する必要はないと思います。「天に宝を積んでいる」と考えれば良いのです。「隣人への奉仕」は地味なくらいが丁度良いのです。

「賞賛」や「見返り」を求めず、長期的に誰かの「支え」になる。「主」はそれをキチンと見ておられます。「地味」かも知れませんが、「目立たない」かも知れませんが、日本キリスト教会はそれを「実践」出来る教会だと思うのです。

## <日本キリスト教会震災対策事務所より>

### ①第13次被災地ボランティアのご案内

日本キリスト教会震災対策事務所が行っている被災地ボランティアは、第12次からは日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオの指導の下、仙台市若林区笹屋敷(海岸から約2kmの所)でのワークに参加する形で行っています。(A)作業内容は、仮設住宅でのラジオ体操(早朝)、家屋の修繕、田畑作業の手伝い、事業再開に向けて店舗の整理の手伝い等です。(B)また、ワーカーさんたちの為の夕食を作ってくれる団体も募集しているとのことです。現在は、仙台市にある日本基督教団に属する婦人たちが1週間単位で夕食作りに携わってくださっているのですが、休みを得る為には他団体の手が必要となるとのことです。

エマオでの被災地ボランティですが、日本基督教団が責任主体になっているということもあり、被災地ボランティアに参加される方々の多くは日本基督教団に属している方々です。しかし、それ以外の教派からの参加、更には一般の方々からの参加が全くない訳ではありません。また、特質すべき点は、リピーターが多いということです。「3~4回目どころか、7回目」という年配の女性の方さえいました。長く関わってこそ見えてくることもあることでしょし、また、深められていく交わりもあることでしょ。

皆様の参加をお待ちしております。

第14次被災地ボランティアは、9月中旬を予定しています。

リーダー：長老 千葉 正（仙台黒松教会）

(A) [被災地ボランティア] 2013年7月30日（火）～31日（水）

[申し込み〆切] 2013年7月24日（水）

※詳細は同封の別紙をご覧ください。

※学生には1万円までの補助を行っています。

(B) [夕食作りボランティア] 随時

※20～30名位の夕食を作ることになります。従って、4～5名の夕食作りボランティアが必要になるものと思われます。

※基本的な単位は月曜日～金曜日となりますが、多少の融通はきくものと思われます。

※関心を持たれた教会は中家盾までお申し出ください。細かい点についての打合せをエマオと行いたいと思います。

## ②大会人権委員会・震災対策事務所共催公開学習会（於：近畿中会）のご案内

日時：2013年8月29日（木）14時～16時30分

場所：西宮中央教会

講師：菊地純子さん（日本キリスト教協議会（NCC）ドイツ委員会委員長）

テーマ：「原発問題について、ドイツ語圏（ドイツ、スイス）のプロテスタント教会のケースに学ぶ」

参加費：無料

※公開学習会の詳細については、後日、ご案内のチラシをお送りします。

※震災対策事務所の報告も行われます。

## ③被災地フィールドワークについて

(1)現在、鶴見教会が中心となって被災地フィールドワークを計画中です。それ以外の教会でも、是非ご検討ください。

(2)被災地フィールドワークについての一例

[プログラム]

<1日目> 現地→いわきマリンタワー→食品放射能計測所→津波被害跡→いわき海浜自然の家

<2日目> いわき海浜自然の家→もみの木→仮設住宅→ら・ら・ミュウ→現地

[予算一例]

\* 中型バス（約30人乗り）。2日間。現地⇄いわき市 →約120,000円。

\* マリンタワー →子供160円。大人260円。

\* いわき海浜自然の家 →子供宿泊500円+130円。

大人宿泊1,000円+130円。

夕食540円。朝食400円。昼食500円。

\* 傷害保険 →250円

\* その他：献金、お土産、雑費 →α円

→この予算に基づいて30人が参加した場合、子供6,480円+α、大人7,080円+αとなります。

## ④被災動物について

(1)パネル展

[報告] (2013年4月～)

(1) 栃木教会 2013年4月26日（金）～28日（日）

(2) 南柏教会 2013年5月24日（金）～26日（日）

## [予定]

- (1)函館相生教会 2013年6月29日(土)9時～17時  
30日(日)8時30分～16時
- (2)南浦和教会 2013年7月26日(金)午後  
27日(土)午後  
28日(日)午後

## (2)保護活動

2013年6月22日(土)栃木教会ミニシェルターで保護活動を行っている3匹の内1匹がトライアル(お試し期間)に入りました。引き続き、被災猫を迎え入れてくださる家庭を募集しています。

A:オス。2～3歳。白黒。大柄。猫よりも人間が好き。

B:オス。1～2歳。シヤム柄。何にも動じない。人懐っこい。※ただし、異食癖有。

## <献金・献品をありがとうございました>

### ①被災動物支援献金・献品

被災動物支援のための献金・献品がありました。感謝をもって報告させていただきます。

<献金>

4/27	宗像令子(栃木)	10,000円
4/28	神山永(栃木)	5,000円
4/28	門馬久美子・杉山早苗(栃木)	10,000円
4/28	栃木教会	31,168円→被災動物パネル展における募金
4/30	泰利器(苫小牧)	10,000円
5/14	金目伝道所	10,000円
6/7	南柏教会	100,000円→53,919円→被災動物パネル展における募金 →46,081円→献金
6/10	本田千恵(札幌北一条)	1,000円

<献品>

札幌琴似→タオル3箱(ダンボール箱)

中家由布(栃木)→バスタオル2、タオルケット1

(2013年4月21日(日)～6月29日(土)分、敬称略)

### ②第11次被災地ボランティア

田中伊作牧師が、今回の「震災対策News」に、第11次被災地ボランティアのことを踏まえた文章をお寄せくださいました。その第11次被災地ボランティアを行う際、上田教会が田中伊作牧師をリーダーとして送り出してくださったばかりか、交通費・宿泊費なども全て負担してくださいました。感謝をもって報告させていただきます。

### ③第12次被災地ボランティア以降

第12次被災地ボランティアからワークの場所が仙台市となり、再び仙台黒松教会を会場に寝泊まりすることが可能となりました。また、昼食に関しても仙台黒松教会からの差し入れを受けることが出来るようになりました。仙台黒松教会による長きにわたる奉仕を感謝をもって報告させていただきます。

## <その他>

### ①「郡山伝道所の除染実施報告」、「会計事務担当変更のお知らせ」

別途、7月小会までに届くように発送する予定です。